

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Contact and Change : Musical Performance as Oceanic Modern History : the Case of the Solomon Islands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田井, 竜一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003509

オセアニア近代史としての音楽芸能

——ソロモン諸島の事例から——

田 井 竜 一*

はじめに

I 西欧音楽との「最初の接触」

II プランテーション文化における音楽芸能

III キリスト教音楽の受容

IV 太平洋戦争と音楽芸能

V 象徴としてのギター

VI ソロモンポップと現代

おわりに

はじめに

オセアニアにおける、この150年程の間の歴史は、まさに激動の時代といっているものであった。たとえば、メラネシア地域に焦点をあてれば、西欧との最初の接触（16世紀）、航海者との遭遇（18世紀）を前史として、捕鯨船との接触（19世紀前半）、交易商人との交易（19世紀後半）、海外労働への従事（1870～1910年代）、キリスト教の受容（19世紀後半～20世紀初頭）、植民地化（19世紀末期）、太平洋戦争、「カーゴカルト」運動、独立（1970年代、ただしニューカレドニアをのぞく）といった様々な出来事が時系列にならぶ。こうした社会的体験を経る中で、人々は従来いわれてきた様に、外的世界からおしよせるものにただ従属的に身をまかせてきたわけではなく、そうかといって、「伝統」だけをもちだしてそれに拮抗したわけでもなかった。むしろ、外部のものを積極的にとりこんで、それを武器にしていく戦略をとったのである（棚橋 1998）。

それでは、ここで音楽芸能とよぶ、音と身体動作を中心とした表現行為においては、そうした社会体験を経る中で、どの様な行動様式がとられたのであろうか。本稿ではソロモン諸島を事例にし、特に外部からの要素をどの様に受容したかという点に注目

* くらしき作陽大学音楽学部

Key Words: musical performance, cultural contact, reception, musical strategy, Melanesia, Solomon Islands

キーワード：音楽芸能，文化接触，受容，音楽的戦略，メラネシア，ソロモン諸島

しながら、その諸相をみていくことにしたい。

その際に留意しておきたいのは、従来この様な文脈で「外部」の音楽芸能を問題にする時、西欧のみをとりあげる傾向が強かったことである。しかし近年、注目されている様に (Lawrence 1992; Moulin 1994; 1996; Webb 1995), オセアニアの他の地域との音楽的接触・交流が、欧米との接触を契機により頻繁になったこともあわせてかんがえなければならぬであろう。もちろん、ソロモン諸島もその例外ではない。さらにいえば、ソロモン諸島という同一地域内の交流も、より活発になったことも指摘できる (たとえば、ラッセル諸島の事例については田井 (1993a) を参照)。これからの議論では、この2つの外部性を念頭におくことをこころがけたい。

I 西欧音楽との「最初の接触」

ソロモン諸島民と西欧人との最初の接触は、周知の通り1568年に、スペイン人メンドンダーニャの一行との間におこった。その航海記 (*Lord Amherst of Hackney and Basil Thomson* 1901) には、住民との間接的な接触の記録はあるものの、音楽に関する記録はまったくない。その後、西欧の知的世界からソロモン諸島の名はきえるわけであるが、再び西欧世界にしられる様になるのは、18世紀になって各国の航海者が太平洋を活発に探検しはじめてからである。しかし、この時期もまだ接触は間接的なものであり、フランスのブーガンヴィルや英国のショートランドといった航海者達の航海記 (ブーガンヴィル 1990, Shortland 1789) にも、音楽芸能に関する記述はみられない。記録の上で、音楽芸能に関する項目が登場するのは、交易商人との交易 (19世紀後半) の時代までまたなければならない。

交易商人の交易品リストをながめると、そこに口琴の名称をみいだすことができる (Bennett 1987: Appendixes)。また、交易商人として長年活躍した A. Hopkins の手記によれば、ハルモニウム (リードオルガンの一種) が地元の人々のお気に入りの楽器になり、口琴は贈り物として認知されていたという (Hopkins 1928: 257)。これらが、資料をみる限り、西欧の音楽との最初の接触をうかがわせる物的証拠であるとおもわれる。ここでいう口琴とは、欧米に多くみられる、金属製の馬蹄形をしたものとかんがえられる。ソロモン諸島においては、隣接地域であるバブアニューギニアと違い、ブーゲンヴィル島の影響の強いショートランド諸島等をのぞいて、口琴 (竹製) は一般的ではないので、口琴の受容は注目される事実である。口琴が交易品としてもちこまれた理由として、持ち運びに簡便で、1人でも気軽に音をたのしめるなどいく

つか推察することができるが、確証はえられない。口琴がなぜ人々にこのまれたのかという問題は、結局口琴はソロモン諸島に定着しなかった理由と共に、謎のままである。

また、博物学者の H. B. Guppy の著作の中に、地元の人々がコンサーティーナ（携帯用のリードオルガン属楽器）によってワルツ風舞曲を演奏したという記述と、その記譜がある（Guppy 1887: 140-141）。この著作は、刊行が1887年というソロモン諸島関係のものとしては最初期に属するものであり、西欧の音楽および楽器の受容が、この時期にはかなりの程度すすんでいることをうかがわせていて、興味深い。

さらに、時代はややくだるが、今世紀初頭、キリスト教の宣教師達は、「原住民」との溝をうめるために、「音楽の断片」をオルガンで演奏したという（Wench 1961: 149）。後述する様に、キリスト教の宣教師達は、布教に音楽を非常に効果的に使用したのであるが、この事例はその初期のものであるといえよう。

最後に、蓄音機という新しいメディアとの関わりに注目しておきたい。西欧的世界の中心からみて、ソロモン諸島の様な場所は辺境の地であり、こうした新しいメディアの到来には時間がかかりかかったようにおもわれがちである。しかし、記録物からは、蓄音機の到来は意外に早い時期であったことがよみとれる。たとえば、探検家の夫と共に、ソロモン諸島を新婚旅行（当時の常識からかんがえてこれはかなり例外的な事柄である）でおとずれた Osa H. Johnson の記述をみてみよう。

それによると、マライタ島に滞在中に彼らが世話になった植民地行政官の W.R. ベルは、夕食の後、John McCormack の“Remember”や、Gilbert と Sullivan の共作による曲（おそらくオペレッタの中の曲）などをくりかえし再生したという（Johnson 1944: 6-7）。ベルといえば、人頭税徴税をはじめとする西欧的システムを強力におしすすめ、その結果本人をふくむ16名がマライタ島民にころされるという、ソロモン近代史上有名な事件の主人公となる人物である（Keesing and Corris 1980）。Johnson の著作には、その訪問時期がかかれていないが、記述内容から推定して、1917年前後でないかとおもわれる。ちなみに、Johnson 自身が、ウクレレで、“Honolulu Tomboy”や“Aloha”“Sweet Little Maori Girl”などを演奏して、ベルによろこばれたことや、彼らが自室にもどってから、ベルのかけるレコード、アマガエルの鳴き声、コオロギの合奏の音が一体となってきこえたことも印象深く記述されている（Johnson 1944: 6-7）。

これをはじめとしたいくつかの事例により、植民者および植民地政府行政官といった西欧人居住者の生活において、蓄音機というメディアがもつ意味はかなり大きかつ

たということがうかがえる。そして、ここで注目したいのは、もちろんこうしたメディアの享受者は一次的には西欧人であったわけであるが、西欧人の使用人としてやとわられていたソロモン諸島民が、「蓄音機係」として臨席しており、それらを享受できる立場にいたという事実である。つまり、ここにおいて間接的なメディアへの接触があったわけで、そうした体験もまた人々のその後の音楽創造に影響をあたえたとかんがえられる。

以上、楽器・種目・メディアといった観点から、ソロモン諸島民と西欧音楽の接触の初期的状況をみてきた。そしてここで確認できたのは、西欧と本格的な接触をしはじめた早い段階において、西欧の音楽はかなりの程度受容されていたということと、メディアとの遭遇も相当に早かったという事実である。

II プランテーション文化における音楽芸能

植民地体制において、プランテーションは政治的支配システムとならんで、その象徴的存在であった。ソロモン諸島においては、1884年のドイツによる保護領化（ブーゲンヴィル島、チョイスル島、サンタイザベル島、オントンジャワ環礁、後にブーゲンヴィル島以外の3島はイギリスに譲渡）、および1893年のイギリスによる保護領化をふまえて、1900年代から白人入植者による国内プランテーションが展開する。これにともない、ソロモン諸島民もプランテーション労働者として従事するようになる。

しかし、ソロモン諸島をふくむメラネシアに居住する人々にとって、それ以前にもう1つのプランテーション体験があった。それは1870～1910年代に展開した、海外労働である。これはサトウキビを中心としたプランテーションにおける労働者を、太平洋諸島民にもとめたものである。ソロモン諸島からは、オーストラリア・クィーンズランドに1万9,000人、フィジーに1万人（その他にサモア、ニューカレドニアなど）と多くの人々が従事し、中には出身地にかえれなくてかの地に定住した人々もいた（Corris 1973; Moore 1985）。

この様に、ソロモン諸島民には2つのプランテーション体験があったわけであるが、プランテーションは経済的・社会的存在のみならず、異文化交流・受容の場としての意味もあった。そして、異文化の受容には2つの局面があった。その1つは近代西欧の社会・文化との集約的な遭遇であり、もう1つは言語や文化を異にする近隣の島々との大規模な交流である。その結果、そこでは「プランテーション文化」（Keesing 1988）とよべる独特の文化複合が成立することになった。そして、その担い手達は

やがて、取得した物質文化・技術・知識・行動様式・宗教などの様々な経験を、それぞれの出身地へもちかえった(棚橋 1998: 267-268)。もちろん、彼らがもちかえったものには、歌唱・舞踊・楽器などもふくまれていたのである。

ここで、海外労働と音楽芸能との関わりをみてみよう。まず、労働者の徴集については“Blackbirders”とよばれる労働力徴集人が行脚し、初期の頃は誘拐に近い形で人々をつれさったことで悪名高い。ただし、海外労働の後期になると、人々はむしろすすんで「出稼ぎ」にでむいたことに留意する必要がある(棚橋 1989)。その労働力徴集人達にとって、蓄音機はリクルートの「道具」として重宝されたという(Vandercook 1938: 279-281)。前節でのべた、メディアの使用の最も早い例としても注目しよ。また、労働力徴集人であった J. D. Melvin の手記によれば、島々とプランテーションの間の行き帰りの船中で、出身地の違う人々がそれぞれの伝統的な舞踊を披露しあったという(Melvin 1977: 28)。これなどは、最も初期の音楽芸能の脱文脈化といえることができる。

それでは、プランテーション内においては、どのような形で音楽芸能がえんじられ、交流がおこなわれたのであろうか。海外労働に関する先行研究においては、主として労働者の社会的・経済的・衛生的な状況に関心があつており、文化的な側面については十分な説明がおこなわれているとはいえない(Moore 1985)。その中で、海外労働経験者に直接インタビューをおこなった歴史学者の Peter Corris は、いくつかの興味深い報告をおこなっている(Corris 1973)。

それによれば、まずこれは特にフィジーのプランテーションにおいてであるが、ソロモン諸島民労働者の余暇は、町にでて踊りをおどったり、ギャンブルをしたり、フィジー人とつきあったり、あるいは波止場で太平洋中からきている島嶼出身の船員との交流をすることであったという(Corris 1973: 84)。また、各海外労働地において、町にでかけない場合の彼らの余暇は、ギャンブル、他の農園やプランテーションにいる友人の訪問、魚釣り、鳥の狩猟、その他の遊びであった。さらに、行商人のルートにあたっていたプランテーションにおいては、彼らの訪問が気晴らしとなり、夜にはキャンプファイヤーをして、おどったり、うたったり、コンサーティーナ・口琴・ホイッスル等を演奏したという(Corris 1973: 85)。

こうした文脈において、どのような音楽芸能の種目が演じられたのかについては、コンサーティーナに代表される様な西欧の大衆音楽が演奏されたこと等以外は、残念ながら定かではない。しかし、クィーンズランド帰りのソロモン諸島民の荷物に、一包みの楽譜があったという逸話(Melvin 1977: 7)からもわかる通り、西欧音楽の受容

はかなりの程度であったことがうかがえる。また、プランテーションにおいても、祖先崇拜や呪術といった伝統的な呪術・宗教体系を人々が固持した (Mercer and Moore 1976) のと同様に、伝統的な音楽芸能がえんじつづけられていた可能性は大きい。

しかしその一方で、前述の様に、プランテーションにいくまでに既に音楽芸能の交流ははじまっていたのであり、プランテーション内部での音楽芸能の交流もまた、同時に活発におこなわれていたことは想像に難くない。事実、フィジーのプランテーションにおいては、一般のフィジー人との文化交流が盛んにおこなわれた。その結果、ソロモン諸島民は、宗教的な慣習 (呪術など) ・衣裳・神話・歌唱などを出身地にもちかえったという (Corris 1973: 97)。

以上の様に、プランテーションという特殊な状況におかれた人々は、そこでオセアニア内外の文化と遭遇・交流したり、そうした文脈ではぐくまれた音楽芸能をそれぞれの出身地にもちかえった。そして、それらは一種のファッションとして各地に定着していき、その後の音楽様式の展開に影響をあたえた。この様な行動様式は、後述する様に、その後の国内プランテーションにおいても同様の形でくりかえされることになる (第V節参照)。プランテーションはまさに音楽芸能の媒介者であったのである。

III キリスト教音楽の受容

19世紀後半のソロモン諸島において、植民者や植民地政府と共に西欧文化の接触の要となったのが、キリスト教の宣教師達であった。1845年の最初の到来以降、苦心をかさねていた英国国教会、カトリック、メソジスト派といった各ミッションも、1890年代になると常駐する様になった。ソロモン諸島におけるキリスト教受容は、信仰の側面だけでとらえることはできない。そこによみとれるものは、富と物質へのあこがれや、平和の思想への共感であり、そして宗教的、政治的双方の意味で新しい「力」をえようとする願望である。また、「復活」観念が欠如しており、現世主義的傾向をもつことも特色といえよう (秋道・関根・田井 1996: 第6章)。

初期の布教において、宣教師達はキリスト教音楽を重視した。長らく、キリスト教における教育において、聖歌の習得は聖書の読み書きとならんで中心なものであった。そして、やがて人々もまたキリスト教音楽を嗜好することになったのである。

初期の布教の様子と音楽の受容のあり方を彷彿とさせるものに、サンタイザベル島のキリスト教受容パフォーマンス、ビナボリがある。これは、今世紀初頭に、州都の

あるブアラ村に初めてキリスト教が伝来したことを記念して、毎年村人総出でおこなうものである。元々は、当時学校の教師であった **Hendly Vasula** 氏（1914生まれ）が、子供達にキリスト教伝来の由来をおしえるために、1947年頃にはじめたものといわれる。全体は、西ソロモンからの襲撃をうける様子をえがいた第1部、キリスト教のブアラ村への到来をえがいた第2部、そしてキリスト教の布教活動をえがいた第3部といった、3部構成になっている。特に第3部では、ミッション達苦勞しながら、洗礼、堅信礼（仰告白式）、聖歌、祈禱、礼拝のやり方（聖餐式、信条）、アルファベットおよび数のかぞえ方等を人々におしえていく様を、克明に描写している。

中でもおもしろいのは、ソロモン人カテキストが人々に聖歌をおしえる場面である。まず最初に音名唱法（ドレミ唱法）をおしえ、その後聖歌に移行する。彼は棒をふりながら懸命におしえるが、人々は最初どうやってよいのかわからず、とまどうばかりである。やがてうたいたしても音程があわず、すぐにばらばらになってしまう。しかし回数をかさねるうちに、やがてそろろ様になっていく（以上、1993年の実見にもとづく）。

もちろん、このパフォーマンスは、史実を忠実に再現したものではない。キリスト教を受容する場面でまったく葛藤がなかったり、全体的に「暗・邪の時代＝異教時代」から「明・正の時代＝キリスト教時代」へといった二分法的な思考がみられるなど、後代のキリスト教のイデオロギー的解釈が支配しているのは事実である。しかし、他の文献（White 1991）を参照すると、個々の部分はかなりの程度当時の様子を反映しているとかがえられる。

このパフォーマンスがしめす様に、初期においては宣教師達の苦勞の連続であったキリスト教音楽も、やがてねづいていくようになる。それにともなって、キリスト教音楽の現地化・内在化がおこなわれる様になった。たとえば、当初ラテン語や英語でうたっていた聖歌を現地語でうたったり、欧米の旋律一辺倒であったものが、現地の旋律がとりいれる様になる。また、最初は礼拝の音楽である聖歌だけであったのが、アクション・ソングなど礼拝以外に、教会の外でうたう、キリスト教にまつわる歌も生まれるにいたった。たとえば、サンタイザベル島では両者を、「教会の内の音楽」「教会の外の音楽」という概念で明確に区別している。

それでは、こうして定着したキリスト教音楽は、どの様な響きをもっていたのであろうか。前述の **H. B. Guppy** は、キリスト教布教初期の聖歌をきいた人物とかがえられるが、的確な和声、音域の広さ、および耳の良さを指摘している（Guppy 1887: 140-141）。**A. Hopkins** もまた声の良さと多声部合唱の才能について言及して

いる (Hopkins 1928: 257)。ポートレート画家の Caroline Mytinger は「高い音程と金切り声」(Mytinger 1943: 194)、そして時代はくだるが、太平洋戦争に従軍した Jack Poulton は、「透明でベルの様な音色」(Poulton 1993: 95) といった表現で、聖歌を描写している。

この様なキリスト教音楽は、やがて人々にとって重要な意味をもつようになっていく。この点について、1930年代初頭にマライタ島で調査をおこなった人類学者の H. Ian Hogbin は、人々の間に礼拝にくわわる楽しみ、特に聖歌の合唱にくわわる喜びを剥奪されたくないという思いが強いと述べている (Hogbin 1939: 178)。この段階において既に、キリスト教音楽をえんじるということは、信仰表現だけではなく、社会的に意味のある行為となっていたのである。

その一方、キリスト教の布教により、それまでえんじられていた音楽芸能は、大きな影響をうけることとなった。重要な種目は例外なく、それまでの祖先崇拜信仰やビグマンを中心とした社会システムと深くむすびついており、そこにはミッションがうけいられないものが多く存在していた。たとえば、祖先に対するよびかけの歌唱であるとか、西ソロモンに顕著な戦闘の舞踊、あるいは性的な表現のある舞踊などである。それらはたちどころに禁止処分にあってしまう。

ただし、従前の音楽芸能全般への対応については、宗派によって相違がでてくる。カトリック派や英国国教会派は、前述した種目など以外については比較的寛容であったので、比較的多くの種目が伝承されることとなった(もっとも、キリスト教音楽が既存の音楽芸能に影響をあたえるといった事柄は別途おきてくる。この問題については田井(1993a)を参照)。一方、よりラジカルな考えをもつプロテスタント系の宗派(たとえば安息日再臨派(SDA)や南洋伝導教会(SSEC)など)は、あらゆる伝統的な音楽芸能を禁止した。そのため、現在でもプロテスタントが多数派をしめる地域では、伝統的な音楽芸能はまったくといってよい程のこっていない。

カトリック派や英国国教会派の優勢な地域では、特に独立後になってからは、民族主義的な気運もあり、かつて禁止されていた戦闘の舞踊などが復活してくる。もちろん従前の文脈ではない。まず、キリスト教の倫理コードに抵触することがない様に配慮されており、首狩りや祖先崇拜を想起させるものは巧みに別の意味に転換されている(田井 1993a)。

以上の様に、キリスト教の受容は、ソロモン諸島における音楽芸能史において、その後の音楽生活の中心となる種目をもたらしたばかりではなく、既存の音楽芸能のその後の展開にも大きな影響力をもつこととなった。

Ⅳ 太平洋戦争と音楽芸能

近年、太平洋戦争を日本や連合軍における戦史ではなく、太平洋諸島民自身の観点から戦争体験を記録し、その意味をといなおそうという動きが顕著になっている (Laracy and White 1988; White *et al.* 1988; White 1991)。この様な戦争他経験は、語りのみならず (あるいはそれと共に)、歌唱や舞踊などでも表出されている。ソロモン諸島においても、戦後各地で、「戦争の歌」「戦争の舞踊」といった名称をもつ種目が生まれた。そこでは主に、戦闘の内容や戦争による混乱と辛さの嘆き、軍隊のためにはたらいた体験や、軍隊がもちこんできた新しい物質や技術に対する驚きなどがうたいこまれている (Lindsrtom and White 1993)。たとえば、サンタイザベル島のある「戦争の歌」では、上陸用舟艇で上陸してきた兵士達が、連合軍の補給基地ができたラッセル諸島などに男性達をつれていったので、のこされた女性達がなげきかなしむといった内容をうたっている (1993年のフィールドワーク資料にもとづく)。

一方で、太平洋戦争は太平洋島嶼民にも多大な損害をあたえたが、大規模な形での文化接触の場でもあった。ここでは、この様な特異な文脈における音楽交流の諸相をみていくことにしよう。

連合軍の軍隊や慰問部隊は、新しい音楽様式、楽器、音楽テクノロジーをソロモン諸島にもちこんできた (Lindstrom and White 1990: 157)。新しい音楽様式とは、当時アメリカ合州国ではやっていたスウィング・ジャズ、ブギウギ等のことであり、楽器とは、兵士の精神安定にやくだつという理由で軍当局が推奨していた、携帯に便利な、ハーモニカ、ギター、ウクレレ、アコーディオンといった小型の楽器の類である。音楽テクノロジーには、これも当時アメリカ合州国が先端をいていた、レコード、ラジオ、録音機、映画等といったメディアがふくまれる。前述した様に、その一部は既に当地にもたらされていたわけであるが、太平洋戦争時のそれは、量・質共に比較にならないものであった。

中でも、USO (United Service Organization) が、連合軍の駐留地各地に派遣した、ショーを中心とした慰問部隊の楽団は、その後大きな影響をあたえることとなった。これは6、7人で構成するものであり、その内訳はピアノ、アコーディオン、トランペット・トロンボーン・サクソフォーン・クラリネットのうちのいくつか、ギター、ベース、それに歌手であった (Webb 1995: 248, 255)。また、駐留軍は映画を良く上演し、兵隊達とまじって、労働者としてはたらいていたソロモン諸島民もそれ

らに親しく接したのであった。そうした映画のサウンドトラックには、カントリー・ウェスタン調のカウボーイ・ソング頻繁にながれていた (Webb 1995: 235)。

こうした音楽的状况に対するソロモン諸島民の反応のあり方として、サンタイザベル島の Clement Felo 氏の例をあげよう。氏は若い頃、地元住民を労働者として徴用した、ソロモン諸島労働部隊ではたらいっていた。その時に、アメリカ人の友人にならった、英国の叙情歌からカントリー・ウェスタンまでの数々の曲を現在でもおぼえているという。また、ラッセル諸島駐在部隊のための USO によるクリスマス・ショーに出演したのである (Lindstrom and White 1990: 159)。

一方、ソロモン諸島各地に駐留した軍隊は、「原住民対策」ということで、大量のギターをもちこみ、ローカルバンドの育成をはかった。1944年10月に、ガダルカナル島で撮影された1枚の写真がある。そこには米海軍の兵士と地元のバンド the Jungle Rhythm Boys との交歓がうつつている (Lindstrom and White 1990: 154)。その様は、戦後すぐに成立することになるギター音楽のバンドとほとんど同値である。

慰問部隊の楽団の楽器編成とその奏法、および主に演奏していた音楽様式 (スウィング・ジャズやブギウギ)、大量にもちこまれたギター、それに映画のサウンドトラックにおけるカントリー・ウェスタン調のカウボーイ・ソングといった様々な要素が、戦後におけるギター音楽の直接のルーツとなった。太平洋戦争は人々に、大規模な形での新しい音楽要素の摂取をうながしたのである。

V 象徴としてのギター

ソロモン諸島におけるギターならびにギター音楽の受容は意外に古い。キリスト教の布教に際して、特にメソジスト派は創設以来、多数のポリネシア出身のいわゆる「原住民」教師 (カテキスト) を採用しており (Crocombe and Crocombe 1982)、彼らは西欧化 (キリスト教化) したポリネシア文化をそれぞれの赴任地にもちこんだ。たとえばトンガからのメソジスト派の伝道士は、1905年にチョイスル島南部にキリスト教を初めてつたえたが、彼らはギターおよびそれをもちいた、欧米の音楽とポリネシアの音楽が融合した新しい様式の音楽舞踊フラ (対面のラインダンス) ももたらした。人々は見聴きしたものを元に、地元にある材料 (パンダヌス等) で3弦ギターを製作し、それを伴奏にして恋愛や時事的な事柄をもちこんだケラ・ギタギタ (「ギターの歌」) をつくってうたったという (Tai 1997)。しかし、当時のギターならびにギター音楽の受容は、一過的・部分的なものであり、その大きな展開は太平洋戦争後、それ

も1950年代にはいつてからのこととなる。

太平洋戦争がおわって社会が落ち着きをとりもどした頃、メラネシア各地に、ギター、ウクレレ、石油缶製のベース、それに歌唱がくわわる、ストリングバンドとよぶ様式が誕生した。そこには、前節でのべた戦争中に体験した様々な要素をみてとることができる。その意味で、各地のストリングバンドは独立発生したものとかんがえられる。

ソロモン諸島においても様々な形態のギター音楽が、各地でもてはやされるようになった。ソロモン諸島では、1900年から1930年代にかけて、コブラ（乾燥ココヤシの実、石鹼などの材料になる）を中心としたプランテーションが展開する。第Ⅱ節で言及した、国内プランテーションである。男性達も、1920年にかせられるようになった人頭税のために現金収入をえる必要から、ニュージョージア諸島などのプランテーションに出稼ぎに行くようになった。国内プランテーションも、情報センター的な役割をはたしており、人々はここで外の世界の多種多様で大量な情報や物質にふれることになり、それらを自分の出身地の村にもちかえった。ギターを中心とした新しい音楽表現との出会いと伝播の主要な経路は、このような背景の中でうまれた。

ここでその一例として、チョイスル島シロヴァンガ地区における事例をみてみよう。1945年にニュージョージア島のロビアナ（西ソロモンにおけるプランテーションおよびメソジスト派の中心地）に働きにでていた、同地区出身の Grasio Jaribatu 氏は、当時非常に盛んであった、バンブーバンドに大いにみせられた。これは、1920年代に同地で誕生したもので、従来のスタンピングチューブの奏法を元にした巨大な打奏の竹製パンパイプを中心に、ギターやウクレレ、それに歌唱をくわえるものである。いわばこれは、ストリングバンドと打奏の竹製パンパイプが、合体したものといえよう。彼はその製作法と奏法を習得し、1950年に出身地にもどった時にそれを人々につたえた。1953年には氏によって、地元のバンドが結成された。

この移入された様式はケラ・ボルとよばれ、さらに女性達によって舞踊ヴェンガ・ボル（サークルダンス）もつけられるようになった。これを皮切りに、同地では1960年代から70年代にかけて、ピク、ピク・サンライズ、サイクロン、ゴンガラといった、新しい音楽の様式が次々にうまれていくことになる（いずれも、2人1組の男女によるサークルダンスが付随）(Tai 1997)。その背景には、1950年代から60年代にかけて、中国商人をつうじて既製品のギターが入手しやすいものになったこともあげられる。

ここで注目すべきは、ピクが元々は東ソロモンのマキラ（サンクリストバル）島からきた踊りといわれたり、ピク・サンライズやサイクロンが、地元の人々が独自に展

開させたピクのヴァリエーションであること、およびゴンガラの原因が、フィジーのプランテーションに働いていた人々によってもたらされたトララエとされている事実である（トララエとはおそらく、フィジーのカップル・ダンスのタララ（Lee 1983: Ch. 3）のことであろう）。すなわちここには、外部から取得した様々な要素を基に、人々が自分達流のアレンジをほどこし、その結果様々なヴァリエーションが誕生している過程をみてとることができる。

また、チョイスル島におけるギター音楽の受容は、社会に別のインパクトをあたえた。シロヴァンガ地区では、伝統的に女性達のみが「恋人への泣き歌」をうたっていたが、ギター音楽の導入によって、今度は男性達が「恋人への泣き歌」をうたいはじめた。このことは経済システム・社会関係・価値観の変容を背景にしながら、男性達が自ら意思決定をすることによって、音楽概念・観念にも大きな変革がおきたことを意味している（田井 1993b）。

これらのギター音楽は、一般に有節歌曲の形式をとり、村の若い男性達によって、非常に高い音域を使用していた（時には裏声になる）、単純なコード進行をもち、速いテンポによるギターをかきならすような奏法をとる傾向がある。また歌詞の内容のほとんどが恋愛に関するものである（Clark 1986）。そこには、スウィング、ブギウギ、カウボーイ・ソング、ゴスペル、ハワイアン・ソングといった、太平洋戦争中に人々が受容した様々な種目の響きをききとることができる。たとえば、ストリングバンドの石油缶製のベースがかなでるリズムは、スウィングにおけるリズム装飾を、またバンブーバンドにおける打奏の竹製パンパイプによるリズムは、ブギウギにおけるピアノおよびベースによるリズム装飾を彷彿とさせる。そして、前述の高い音域や裏声は、人々が映画で見聞きしたカントリー・ウェスタン調のカウボーイ・ソングに他ならない（Webb 1995: 256-267）。

以上の様に、ギター音楽はソロモン諸島において、すっかり定着することとなった。なぜ、これ程までギターがもてはやされたのであろうか。まず指摘できるのが、持ち運びが簡便なことや、比較的簡単に奏法を習得できるのに対してえられる喜びが大きいこと、様式的に多様な可能性があることである。しかしながら、その普及度の量と質は、それだけでは説明することができない。ギターにはそれ以上の意味が付与されたのではないだろうか。

そこでかんがえられるのが、ギターの所有およびその技術の習得が、男性にとってステータスシンボルとなったことである。つまり、外部からの新しい「力」を象徴するギターによって、異性の気をひこうとする欲望があったとかんがえられる。それと

同時に、ギターならびにその音楽は、強い力をもつ「アメリカ」を連想させるものでもあったといえよう。当時から今日にいたるまで、男性のみがギターをかなで、女性は決してさわろうとしないことも、それらと無関係ではないであろう。

VI ソロモンポップと現代

ソロモン諸島の独立する1978年をはさんで、1980年代になると、世界的なポピュラー音楽の影響を受けた、シングシング（「歌」「ポピュラーソング」の意）が展開する様になった。これらは、ラジオ放送や、ラジオ局制作のまたは自主制作のカセットテープをつうじて、あるいはホテルやディスコでのダンスパーティーにおける生演奏等によって、人口に膾炙している。比較的最近に活躍していたグループとして、ユニサウンドバンド、RYO (Rural Youth Orchestra)、シシリキティ、オキナワバンド、アイロンジュースなどをあげることができる。

これらのグループは、電気ギターやキーボードなどの電気楽器やドラムスを使用する。言語は、母語、ソロモン・ピジンイングリッシュおよび英語を併用ないしは混用している。中には、対自地域（母語）、対ソロモン諸島・メラネシア帯（ピジンイングリッシュ）、対外（英語）のそれぞれで、言語をつかいわけている場合もある。

その内容は、都市部に居住する人々の直面している社会問題（無職、飲酒、民族・地域間の葛藤、女性の苦勞等）や価値観（伝統と現代の相克）、心情（人生の悲哀、恋愛）などをもちこむものである。

また、音楽様式およびビートとしては、フォークソングやカントリー・アンド・ウェスタン、およびレゲエやカリプソなどの援用が顕著であり、やや遅いテンポ、重い感じのリズムで演奏することを特徴とする。フォークソングやカントリー・アンド・ウェスタンからの影響は、明らかに前述した、太平洋戦争時代以来の外来音楽の系譜をうけつぐものである。また、ラジオ局 SIBC（ソロモン諸島放送協会）の開局当初に、旧宗主国の英国連邦やアメリカ合州国からの援助として、かなり以前のこの種のレコードが大量に寄贈され、それらが頻繁に放送されたことも、そうした状況を助長したとかがえられる。

レゲエやカリプソについても、現在世界中でもっとも人気のあるリズム・様式であるという事情だけではないであろう。その元々の担い手がソロモン諸島民と同じ「ブラック」系であることへの親近性や、その基盤にある反人種差別的メッセージへの共感が根底にあるとかがえられる。

さて、これらのソロモンポップは、一聴した場合、音楽の様式として独自のものを確立しているかどうか疑問の向きもあろう。しかしながら、内実をよくみると、音楽様式およびビートは外部型、テンポやリズム観は従来型、歌詞の内容やメッセージは従来型といった様に、要素毎に取捨選択をおこなっていることがわかる。ここに彼らの巧みな音楽的行動様式をよみとることができよう。

おわりに

以上、ほぼ19世紀からの通時的な展開をおいながら、ソロモン諸島の人々が外部の音楽芸能をとりこむ過程と、今度は逆にそうした手法をつかって自分達が経験した事柄を音楽芸能で表出していく過程の双方を考察してきた。ちなみに、植民地体制および「カークガルト」運動と音楽芸能との関わりは重要であり、特に前者におけるブラスバンドのはたした役割などは注目される場所であるが、今回は資料的な限界もあり割愛した。今後の課題としたい。

さて、今までの考察において、ソロモン諸島国の人々が外的世界とかわる中で、外部からの様々な要素をただ漫然と受け入れたのではなく、積極的にもかつ選択的にとりこんできた事実がうかがうことができる。そして、その過程においては、既存の様式に新しいものを付加するというよりも、従来とは隔絶したものとしてそれらを一旦受け入れた上で、そこに自分達なりの自己主張を付加するという行動が一貫してみられる。

それではなぜ、人々は「外的」な要素をかくも積極的に摂取していったのであろうか。それについては、社会における音楽芸能の意味の変遷と連関しているのではないかという仮説を提出したい。前植民地的状況においては、政治的指導者であるビグマンは、音楽芸能のもつ特性を巧みに利用し、様々な形での「音のコントロール」をおこなったり（田井 1997）、音楽・舞踊祭宴の主催や音楽・舞踊グループを近隣の集落に派遣し賞賛をえること（Hogbin 1964: Ch.6）等により、自集落内外に政治的な影響力を確立・保持する一助としていた。また、宗教的な歌唱についても、祭司や長老達の独占とするところであった。いわば音楽芸能は、少数者によってかなり操作されていたとかがえられる。そうしたシステムが、今までのべてきた大きな社会変化の中でくずれていったり形骸化した時、人々はそれまでの制約に束縛されることなく、それぞれの立場から、様々な特性をもつ音楽芸能を、各媒体を通じて自由に摂取したり、操作することが可能になったのではないだろうか。

人々にとって外部の音楽とは、常に一種の力性をもっている。それを取得し効果的に発揮することは、西欧近代に対峙する人々にとって、重要な行動様式となっていたのである。

文 献

秋道智彌・関根久雄・田井竜一編

1996 『ソロモン諸島の生活誌——文化・歴史・社会』東京：明石書店。

Bennett, Judith A.

1987 *Wealth of the Solomons: A History of a Pacific Archipelago, 1800-1978*. Honolulu: University of Hawaii Press.

ブーガンヴィル

1990 『世界周航記』(17・18世紀大旅行記叢書2) 山本淳一訳, 東京: 岩波書店。(Bougainville, Louis-Antoine de, *Voyage Autour du Monde, par La Fregate du Roi LaBoudeuse, et La Flute L'Etoile; en 1766, 1767, 1768 & 1769*. Paris. Charlottesville: University Press of Virginia.)

Clark, Ross

1986 Some Notes on Neo-Melanesian Music. In Thomas, Allan and Ross Clark (eds), *Asia Pacific Voices*. *Canzona* (Victoria University of Wellington Press) 7(24), 68-70.

Corris, Peter

1973 *Passage, Port and Plantation: A History of Solomon Islands Labour Migration 1870-1914*. Melbourne: Melbourne University Press.

Crocombe, Ron and Marjorie Crocombe (eds)

1982 *Polynesian Missions in Melanesia*. Suva: The Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.

Guppy, Henry Brougham

1887 *The Solomon Islands and Their Natives*. London: Swan Sonnenschein.

Hogbin, H. Ian

1939 *Experiments in Civilization: The Effects of European Culture on a Native Community of the Solomon Islands*. London: Routledge.

Reprint in 1969.

1964 *A Guadalcanal Society: The Kaoka Speakers*. New York: Holt Rinehart & Winston.

Hopkins, A.

1928 *In the Isles of King Solomon: An Account of Twenty-five Years Spent amongst the Primitive Solomon Islanders*. London: Seely, Service.

Johnson, Osa H.

1944 *Bride in the Solomons*. New York: Garden City.

Keesing, Roger M.

1988 *Melanesian Pidgin and the Oceanic Substrate*. Stanford: Stanford University Press.

Keesing, Roger M. and Peter Corris

1980 *Lightning Meets the West Wind: The Malaita Massacre*. Melbourne: Oxford University Press.

Laracy, Hugo and Geoffrey White (eds)

1988 Taem Blong Faet: World War II in Melanesia. 'O'O: *A Journal of Solomon Islands Studies* 1(4) (special issue).

1993 Singing History: Island Songs from the Pacific War. In Dark, Philip J.C. and Roger G. Rose (eds), *Artistic Heritage in a Changing Pacific*, pp. 185-196. Bathurst, NSW, Australia: Crawford House Press.

Lawrence, Helen Reeves

- 1992 Is the Tahitian Drum Dance Really Tahitian?: Re-evaluating the Evidence for the Origins of Contemporary Polynesian Drum Dance. *Yearbook for Traditional Music* 24, 126-135.
- Lee, Dorothy Sara
1983 *Music Performance and the Negotiation of Identity in Eastern Viti Levu, Fiji*. Ph. D. dissertation, Indiana University.
- Lindstrom, Lamont and Geoffrey White
1990 *Island Encounters: Black and White Memories of the Pacific War*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Lord Amherst of Hackney and Basil Thomson (eds)
1901 *The Discovery of the Solomon Islands by Alvaro de Mendana in 1568: Translated from the Original Spanish Manuscripts. Vols. I-II*. London: Hakluyt Society. Reprinted by Kraus Reprint, Millwood, N.Y. in 1967.
- Melvin, Joseph Dalgarno
1977 *The Cruise of the Helena: A Labour-recruiting Voyage to the Solomon Islands* (ed. Peter Corris). Melbourne: The Hawthorn Press.
- Mercer, P. M. and C. R. Moore
1976 Melanesians in North Queensland: The Retention of Indigenous Religious and Magical Practices. *Journal of Pacific History* 11(1), 66-88.
- Moore, Clive
1985 *Kanaka: A History of Melanesian Mackay*. Port Moresby: Institute of Papua New Guinea Studies and University of Papua New Guinea Press.
- Moulin, Jane Freeman
1994 Chants of Power: Countering Hegemony in the Marquesas Islands. *Yearbook for Traditional Music* 26, 1-19.
1996 What's Mine is Yours?: Cultural Borrowing in a Pacific Context. *The Contemporary Pacific* 8, 128-153.
- Mytinger, Caroline
1942 *Headhunting in the Solomon Islands around the Coral Sea*. New York: Macmillan.
- Poulton, Jane Weaver (ed.)
1993 *A Better Legend: From the World War II Letters of Jack and Jane Poulton*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Seward, Robert
1994 *Radio Happy Isles: The Play of Media in the Small Island States of the Pacific*. (Occasional Paper 3). Institute For International Studies, Meiji Gakuin University.
- Shortland, John
1789 The Journal of Lieutenant Shortland in the Voyage of Governor Phillip to Botany Bay. In Philip Arthur, *The Voyage of Governor Phillip to Botany Bay with an Account of the Establishment of the Colonies of Port Jackson & Norfolk Island*. London: Printed for John Stockdale, Piccadilly, pp. 129-140. Reprinted by Angus Robertson, Sydney in 1970.
- 田井竜一
1993a 「ソロモン諸島国の社会変化と音楽芸能」須藤健一, 秋道智彌, 崎山 理編『オセアニア2: 伝統に生きる』pp. 65-77, 東京: 東京大学出版会。
1993b 「昔, 女性が泣き歌い, 今, 男性が泣き歌う——ソロモン諸島国チョイスル島における音楽芸能の動態」谷村晃先生退官記念論文集編集世話人編『音と言葉——谷村晃先生退官記念論文集』pp. 416-430, 東京: 音楽之友社。
1996 「ソロモン諸島国における音楽芸能の『新創造』」藤井知昭監修, 民博「音楽」共同研究編『「音」のフィールドワーク』pp. 144-15, 東京: 東京書籍。
1997 「ラアハ・音・音楽芸能——ソロモン諸島国ショートランド諸島における音楽芸能の政治学」『民族藝術』(民族藝術学会) 13, 161-168。
- Tai, Ryuichi
1997 Guitars Have Come!: The Development and Acceptance of New Styles of Musical

Performance in Choiseul (Lauru) Island, the Solomon Islands. *Perfect Beat (The Pacific Journal of Research into Contemporary Music and Popular Culture)* 3(3), 77-89.

棚橋 訓

- 1989 「ソロモン諸島と労働交易——集成論の検討を中心とする覚書」慶応義塾大学民族学考古学研究室編『考古学の世界』pp. 165-180, 東京：新人物往来社。
1993 「ソロモン諸島のマアツナ・ルール運動」清水昭俊, 吉岡政徳編『オセアニア 3 近代に生きる』pp. 35-52, 東京：東京大学出版会。
1998 「ソロモン諸島の社会運動と中心世界の使い方」清水昭俊編『周辺民族の現在』pp. 264-284, 京都：世界思想社。

Vandercook, John W.

- 1938 *Dark Islands*. London: William Heinemann.

Webb, Michael Hugh

- 1995 *Pipal bilong music tru/A Truly Musical People: Musical Culture, Colonialism, and Identity in Northeastern New Britain, Papua New Guinea, after 1875*. Ph.D Dissertation, Wesleyan University.

Wench, Ida

- 1961 *Mission to Melanesia*. London: Elek Books.

White, Geoffrey M.

- 1991 *Identity through History: Living Stories in a Solomon Islands Society*. Cambridge: Cambridge University Press.

White, Geoffrey (ed.)

- 1991 *Remembering the Pacific War* (Occasional Paper 36). Honolulu: Center for Pacific Islands Studies, School of Hawaiian, Asian & Pacific Studies, University of Hawai'i at Manoa.

White, Geoffrey, David W. Gegeo, David Akin, and Karen Watson-Gegeo (eds)

- 1988 *The Big Death: Solomon Islanders Remember World War II (Bikfala Faet: Olketa Solomon Aelanda Rimbarem Wol Wo Tu)*. Suva and Honiara: the Institute of Pacific Studies and the Solomon Islands Extension Centre of the University of the South Pacific, and the Solomon Islands College of Higher Education. (翻訳：『ビッグ・デス——ソロモン人が回想する第二次世界大戦』, 小柏葉子監訳, 東京：現代史料出版, 1999年)